立ち読み版

第一章　エステティシャンの甘美な罠　006
第二章　風紀委員会のヒミツのお仕事　047
第三章　風紀委員長の義務　109
第四章　被虐デート、嗜虐支配　151
第五章　痴女子ハーレム　212
エピローグ　252

登場人物紹介

Characters

仁科萌花（にしなもえか）

後輩の風紀委員。茶髪ポニテでノリのよい人気者。少し計算高いところも？

花月いろは（かげつ）

後輩の風紀委員。礼儀正しいお嬢さまで、箱入り娘としても知られている。

日比谷大斗（ひびやひろと）

悠理の跡を継いで風紀委員長となったものの、この委員会の隠された役割に気づくことに……。

鷲島悠理（さぎしまゆうり）

先代の風紀委員長で、大斗の憧れの存在。明るい性格としっかりとした振舞いは愛され優等生としても評判。

「ひぃんっっ！　ひっ、や、やだっ……んくぅぅぅっっ！　あぁぁぁ――っっ！」
小柄な大斗の腰は、彼女の右腕で背後から簡単に抱き寄せられ、お尻が後ろに向けて引っ張られてしまう。タックルのような体勢で腰を抱きながら、お尻を犯す左手はローションたっぷりの指をさらに一本追加し、マッサージとオイルで緩みきった菊肉をグイッと押し開いた。捻じ込まれる柔らかな指に、熱く潤んだ腸肉を擦られ、甘く引っ掻かれ、指をくねらせる動きで大きく押し開かれ――。
「ほぉらほら、こうされると身体もすっかり蕩けちゃって……エステに集中できるくらい、気持ちよくなっちゃいますよねぇ、お客様？　グリグリ、グリィィ～～～♪」
「あぐっっ、ふぅぅぅっっ！　んもっ、もほっ、ひゃ、れ……あうぅぅぅっ……」
とうとう指の根元までが捻じ込まれ、それ以外の曲げられた指の関節が肛門周りに触れてきた。埋没し、曲がった指先にお腹の側の腸肉を――つまり、ペニスと睾丸の裏側を揉み解すように圧迫され、擦り上げられる。その刺激に背中がピンと反り返り、腰がビクビクッとはしたなく跳ね躍る。
さらには、腰を抱きかかえた腕の先――優しく股間に添えられた手は、いつ射精してもおかしくないほど張りつめた、大斗の破裂寸前の肉棒をギュッと握り締めた。燃えるような熱い疼きを発する亀頭を捏ね、ペーパーの下着越しを擦りつけるようにして肉傘を引っ掻き、裏筋をくすぐって狂おしいほどの快感を流し込まれる。
（もっ、む、ひっ……無理っ、むひぃぃぃっ……いふっ、ふぁぁぁっっ！）

断末魔の悲鳴のように、喉奥から言葉にならない呻きが流れだした。股間とお尻から迸（ほとばし）る肉悦が背筋を跳ねさせ、脳天を痺れさせ、視界と脳内に眩いばかりの火花がチカチカと舞い散る。指を二本も咥え、完全に開ききった肛門は理性も我慢もかなぐり捨てて、込み上げる牡欲を手放し、本能が求めるままに熱い滾りを放出してしまった。

「いっっ……ふっ、いぐっ……ぅぅっっ、いっっ……くぅぅぅっ……んぅぅっっ！」

――ビュルルッッ……ビュルルルゥ～～～ッッ、ビクビクッ、ドビュルゥッ！

我慢に我慢を重ねた末の射精は、身も心も崩れ落ちてしまうほどの、壮絶な快感の嵐だった。自慰での射精とは違う、お尻の奥から後押しされ、亀頭を捏ねられて、他者にもらさせられる射精なのに、それを気持ちよく感じるのがたまらなく恥ずかしい。

頭の奥ではそう感じているのに、身体はどこまでも快楽に正直に反応し、何度も肉棒を跳ねさせて二度三度と精液の塊を放出してしまう。吐精を続けながら、少女の指に尻穴を抉られ、気がつくと大斗は自ら情けなく腰を振り、ペニスの先端を握り締める彼女の手の中に、まるで性交のように股間を擦りつけて喘いでいた。

「あはっ、お客様ぁ……なんなんですかぁ、このビクビクしてるの？　ほら、わかりますよねぇ？　あたしの右手、すっごい熱いのが跳ねてるんですけどぉ♪」

「はひぃぃぃっっ！　んっく、あぁぁっ、ごめ、なっ、さぁぁ……んひゅぅぅっ！」

女性の声が耳元で叱りつけ、そうされながらもう一度だけ生臭い牡液を排泄する。紙下着の内側をネトネトのドロドロに汚し、それを包む彼女の手をも卑猥な粘液に塗れさせ、

ようやく腰の痙攣を落ち着かせた大斗は、腰を抱かれてお尻を突きだした情けない格好のまま、少女の笑いを耳に、身体中を真っ赤に染めて恥じ入った。

（ふぁっ、ふぅぅぅ……んっ、や、やっひゃ、たぁ……射精、しちゃったぁ……）

後悔と自己嫌悪に頭が冷えきり、けれども快感の余韻で顔は熱く、唇は蕩け、涎がダラダラとこぼれる。そんなだらしない表情を浮かべ、お尻を振りながら脱力した大斗に、エステティシャンは背後から抱きついてきた。のしかかるように身体を押さえつけ、横から顔を覗き込んでほくそ笑みながら、耳元に低くささやきかける。

「ほら、早く答えてくれませんか、お客様？　あたしの手の中にビュービュー吐きだしたこれ、なんなんですか？　どうしてお尻を捏ねて筋肉を解してあげたら、こんなのが大量にもれてきちゃうんです？　初めてですよ、こんなお客様は」

「あうぅぅっ……ご、ごめんなさいっ、ごめっ……ん、なさっ……すいませっ……」

責めるような冷たい声に、ゾクリと背中が震えた。射精はしないようにと言われたのに、マッサージをされただけで射精してしまった――その事実に萎縮し、頭の中が真っ白になって、謝罪の言葉しか出てこない。だが、どれだけ謝っても彼女の声は冷たいまま、責めるような問いが繰り返し返ってくる。

「謝る前に、説明してください。あたし、言いましたよね？　達することだけはないようにって……それともなんです、はっきり言わないとわからなかったんですか？」

「いひぃっ！　ちょ、は、はなひ、へ……んひっ、ひぐぅぅっ！」

亀頭を捏ねるように手を動かされ、絡みついた精液がグチュグチュと音を立てて、股間に不快な感触を広げてきた。そうして、自らの行為がなんだったのかを、大斗の肉体と精神にこれでもかと刻みつけながら、ルールを破った客を罰するように、いまだアナルに埋まったままの指をグイィッと曲げ、さらなる快楽をお尻に注ぎ込む。

「射精はするな――って。ここは風俗店じゃありませんよって、教えてあげないとわからなかったんですか？　どうなんですか、お客様？　ねえ、さっきから聞いてるんですけど、あたし。なんで射精したんですか？　どこか、射精する要素なんてありました？」

「あふっ、んぅっっ、そ、それはぁ……だ、からっ、ごめん、なさ――あうぅっ！」

なおも謝罪を繰り返そうとすると、今度は少し強めにペニスが握り締められる。

「誰が謝ってくれなんて言いました？　あたしは、マッサージを受けながら射精した、その理由を聞いてるんです。どうしても言えないっていうなら、これから店長や、他の従業員も全員集めて、然るべき措置を取らなきゃいけないんですけど」

「し、然るべき、措置って……いひぁぁっ！」

決まっているでしょう、と少女の声がひと際冷たく、低く響いた。

「こちらが性風俗サービスを提供したわけじゃないって、証明するために同じことするんですよ、二十人以上の従業員の前で。あぁ、それと警察も呼ばないとでしょうね、風営法の絡みもありますし。そうなると、お客様のご家族にも連絡しないといけませんか」

その言葉を聞いて、大斗の熱っぽく火照っていた顔が、ようやく現実を理解して瞬く間

に青ざめてゆく。
（そ……んな、それは、ダメっ……困るよ、そんなのっっ……）
そうなればまず、家族に迷惑がかかる。そして学校にも連絡が入り、そちらにも多大な迷惑が及ぶことは避けられないだろう。それで自分が退学になるのはやむを得ない、だが残った学生たちや先生方はどうなる。自分のせいで、謂れのない誹りを受けるかもしれない――そんな事態にだけは、絶対になってはいけない。
「それ、は……困ります、そんなっ……」
「だったら早く説明してください、順番に……まず、どうして勃起したのかってことからです。元々、性的なサービスを求めてきたわけじゃないって、言い訳してましたよね？それがどうして勃起したのか、どうして射精したのか、ちゃんと説明してください」
そう言いながら、少女の手は大斗の尻穴とペニスをしっかりと拘束し、けして離そうとはしない。下手な誤魔化しや嘘、もちろん逃亡も許さないという構えで、少しでもそういう態度を見せれば、すぐにでも通報するという意思が、はっきりと伝わってきた。
「……わ、わかり、ました……ご説明、しますっ……」
半ば脅迫のような形だが、もはやどうにもならない。自分の身に起こったことを一から説明しなければ、彼女は納得してくれないのだ。ならばもうすべてを諦め、つまらないプライドを捨て、恥ずかしくて屈辱的な経験をすべて話すしかなかった。
「本当に、そんなつもりはなかったんですけどっ……オイルで、胸とか脚とか擦られてる

と、その……き、気持ちよく、なって……身体がじゃなくてっ、いえ、身体もなんですけど……お、おち……んっ……股間も、です……」
「へぇ、そうですか……ローションオイルで乳首擦られて、それでよがっちゃって勃起したってことですね。女性にはいらっしゃいますけど、男の人で胸がねぇ……とても信じられませんけど、まぁいいです。とりあえず、続けてください」
「は、はい、それで……」
男のくせに、胸を弄られて感じる変態――そう責めるような冷たい視線が、四つん這いのまま顔だけ振り返らせる大斗の顔を、ジッと見つめていた。
「それで、勃起したあとは……胸――」
「乳首でしょ？」
淡々とした口調で冷たく訂正され、大斗は慌てて言い直す。
「あぅっ……は、はい……乳首を、弄られてるうちに……もっと、どんどん気持ちよくなって……脚を擦られて、そのあとの……股間を擦られてるとき、えっと……き、ん……にも、ちょっと指が当たって、それでますます……」
「よく聞こえません、もっとはっきり言ってください」
「きっ……金玉に、手が当たって……擦れて、気持ちよくなりましたっ……」
女性の前で口にしにくい言葉まではっきりと言わされ、耳がカァッと熱くなる。だがおかしなことに、そんな恥ずかしくて消え入りたくなるような状況にも拘(かかわ)らず、彼女の手に

握られたままの、射精したてで萎えかけていたはずの肉棒はドクドクと脈打ち始め、再び硬さを取り戻していた。
「……なんですか、これ。あたし握ってるだけなんですけど」
「ひぅっ！　ち、違うんです、そのっ……これは、す……すいませんっ……」
ツリ目ながら大きく、丸みを帯びていた瞳がスッと細められる。その眼差しに彼女の怒りを感じ、なんとか勃起を治めようとするが、どうしても興奮の猛りは鎮まってくれず、それどころか彼女の指が僅かに動くだけで、腰まで大きく跳ねてしまう。
（な、なんでなのっ、こんなっ……変だよ、絶対っ……こんなの、ほんとに変態じゃないかっ……最低だ、僕っ……ぐっ、うぅぅっ……）
これ以上はないほどの恥辱に見舞われ、もはや頭の中は真っ白になっていた。言い訳の言葉も思い浮かばず、ただうわ言のように謝罪を繰り返す。そんな大斗の耳元へと、少女は不意に優しい声でささやきかけた。
「はぁ……もういいです、これに関しては目を瞑りますから。とりあえず最後まで、あとは射精に至った経緯をしっかりお願いします……ド変態の、お客様」
「〜〜〜〜〜〜っっ、ひっ、あっ……あぐっ、んっ……は、はいぃ……」
耳朶を舐め、首筋にまで吐息がかかる熱っぽいささやきに、またも射精の気配が込み上げてしまった。しかも、ド変態と指摘を受けた直後にだ。
「そのあと、お、お尻に――」

戸惑いながらも、これ以上は彼女を怒らせてなるまいと、必死に言葉を続ける。
「お尻に指を入れられて、急に射精が我慢できなくなって……離れようとしたら、その……君に腰を引き寄せられて、お、ちん……を、握られたから……」
「なんですか、あたしのせいだって言うんですか？　結局、自分に落ち度はなくて、あたしがマッサージの過程で触ったのが原因ですって、そういうことですか？」
微かな苛立ちを含ませた指摘を受け、先ほどの彼女からの説明を思いだす。人を集めて証明するという、脅迫じみた提案だけは実行させまいと、慌てて大斗は言い直した。
「えっ……ち、違います！　ごめんなさい！　そうじゃなくて、えっと、だから――」
ますます頭が混乱し、考えがまとまらない。身体中から嫌な汗が噴きだすほどに、緊張で熱く火照ってくる。なにも答えられずにいると、呆れたように少女がささやいた。
「じゃあ、やっぱりご自分のせいですよね？　はっきり言いますけど、あたしほとんどおちんちんには触れてないんですから。っていうか、話をまとめると射精した原因、ほとんど乳首とお尻ってことになりますよ？　あとは、お客様が早漏だったってことです」
容赦のない指摘に、認めたくなかった事実を二つも突きつけられ、真っ赤になった顔を上げることができなくなる。大きな瞳には涙まで浮かべ、唇も小さく震えていた。
「そうですね……じゃあ、そのことを認めて、はっきりと宣言していただけますか？　この際、そういったサービスを求めての来店でないことは認めてあげます。代わりに、いまのが事故だったってことを確認したいので、自分で宣言してくださいよ」

「えっ……せ、宣言って、どういう……なにを……」
決まってるでしょ？　と少女の唇が柔らかく笑み、口角が歪む。
「お客様が乳首とお尻――いえ、アナルで感じるド変態だったってことをですよ。それと、ちょっと触られたくらいで簡単に射精しちゃう、子供並の早漏チンポだったってこともです……ほら、ぐずぐずしないでください。自分の名前も込みで、宣言してくださいよ」
「そっ、そんなの――んひぅっッッ⁉　あひっ、ひあぁぁっ！」
粘ついた、けれども一向に温度を失わない彼女の手が、股間から胸元へと移動する。いまだに勃起したままの乳首を摘まれ、クリクリと捻られると、それだけで甲高い嬌声を上げて身悶えてしまった。そんな大斗の姿をクスクスと嘲笑しながら、お尻に埋まった指先が螺旋を描き、蕩けた腸内を抉ってゆく。腰が躍り、けれどもお尻を突きだして捩ってしまうその姿は、彼女の指摘を肯定しているような、あまりに無様な仕草だった。
「あはっ♪　そんな反応しておいて、違いますって言うんですか？　だったらそれでもいいですけど、そのときは大勢集めてもう一回するだけですから……人前で恥を掻きたくなかったら、あたし一人に確認をお願いしたほうがお利口ですよ？」
現状を的確に説明する言葉にハッとし、選択の余地はないと気づく。
（くっ……やるしか、ないんだ……うぐっ、んぅぅっ！　はぁぁっ……）
ニチュ、ニチュゥ、とお尻から卑猥な音が響く。それと同時に流れる快感が股間を滾らせ、勝手に腰がカクカクと揺れてしまう。

「ほら、お客様の名前からですよ。性癖も、全部つなげて宣言してください」
「んくふぅぅぅっっ……いはっ、は、はいっ……あぁぁっ……」
アナルを穿(ほじ)り、腸内を容赦なく引っ掻かれて、それがたまらなく気持ちいいのを自覚させられる。彼女の指摘通り、自分は変態なのだと思い込み、そう思えば思うほど、お尻と乳首、そしてペニスの感度が高まっていくようだった。
「僕っ……僕は、ひ……日比谷大斗は、男のくせにっ……」
「へぇ、日比谷大斗さんですかぁ。それで、男のくせにぃ？」
面白がった、跳ねるような声で少女が耳元に囁(はや)し立てる。その指摘に羞恥と快感を覚えながら、大斗はまともな理性も働かぬまま、宣言を続けてゆく。
「男のくせに、ち……乳首と、アナルが感じる……へん、た……いっ……変態、ですっ……ド変態の、早漏ですっ、すみませんでしたっ……」
プッと噴きだすような笑いが耳に浴びせられ、燃え上がるような羞恥に包まれた。
「いいですねえ、みっともなくて……じゃあ、いまからその裏を取りましょうか、ね？乳首とアナルだけでイケたら、いまのを信じてあげます……もちろん、このことも店長に報告はしませんから。さ、わかったら頑張ってくださいね」
「えっ、ちょ……まっ――んぐぅぅぅっっ⁉」
その瞬間、痛烈な刺激が胸の突起を突き抜け、粘液に捏ねられながら強く引っ張り上げられる。たまらず悲鳴を上げたのと同時、アナルに埋まった指がさらに一本増やされ、三

本の指が熱く潤んだ腸内をグチュグチュと掻き混ぜてゆく。
「んひぃいいっっっ！　いひっ、ひぎぃいんっ！　んなっ、なん、れっ……僕っ、言ったのにっ、言ったのにいいっ！　いひっ、あひいいっ！」
「なに言ってるんです、それが本当だったら事故って認めてあげる約束なんですから……きちんと確認しなきゃ、意味ないじゃないですか。ほらほら、そんなこと言ってる暇あったら、さっきの宣言もっと続けてくださいよ。お客様の頭だけじゃなく、心も身体もはっきりと――ご自分がマゾの変態だって自覚できるよう、何回もです♪」
少女の唇がさりげなく耳朶を食み、ピチャリと音を立てて舌先が肌を舐め擦った。刺激と熱さにゾクッと背中が跳ね、硬く反り返った肉棒の先に、トロトロと先走りが滲んで流れだす。その状態のまま、愛らしい声が歌うように『マゾ、マゾ、お客様はド変態の早漏マゾ♪』と拍子をつけてささやき、嘲笑っていた。
（ひ、がっ……うぅぅっ、違うっ、僕は……んぐっ、僕、はぁぁ……あふぅっ！）
否定するように胸中で叫ぶも、曲がった指がペニスの裏側を押し捏ねると、それだけで頭の奥へ鋭い快楽電流が突き刺さってゆく。恐怖すら覚えるほどの強烈な肛門快楽、けれど逃げだしたいという想いとは裏腹に、腰は背後に引かれ、すでに根元まで咥え込んでいる少女の指を、さらに深く咥え込もうとするようにお尻が突き上げられた。
「ほら、言ってください、言いなさいよ。さっきの宣言ももっとエロく、もっと情けなくして……言わないと、店員集めてアナルマッサージですよぉ？　くすっ……」

（んひぅぅぅっっ……そ、そぇはっ、だ……め、へぇぇ……んくぅっ……）

快楽に蕩ける頭に響く、脅迫じみた言葉。それだけはさせてはならないと、快感に震える大斗の唇がゆっくりと開き、涎を流しながら屈服の宣言を吐きだす。

「僕はっ……ひ、日比谷大斗はっ、どうしようもない変態ですっ、早漏の最低マゾ男ですぅっ！　あ、アナルと乳首、気持ちよくいじられて……射精したくて――」

「あ、そこドピュドピュしたくて、にしましょうか♪　ついでに、早漏子供チンポってのも追加してください。ほら、もう一度最初からでちゅよ～、変態さん？」

（あぐぅっ！　んぁっ、あん、な……可愛い子に、こんなことされてる、僕ぅっ……）

自分より年下かもしれない美少女に心底から馬鹿にされ、けれども逆らえずに、恥辱に股間を大きく跳ねさせながら、乳首を捏ねられる快感に悶えて大斗は繰り返す。

「アナルとぉっ！　乳首っ、気持ちよくいじられてぇ……あふっ、ふぁぁっ！　そ、早漏、子供チンポから……ドピュドピュしたくて、エッチなエステ受けにきましたぁ……ごめんなさいっ、ごめんなさいぃっ！　許してっ、許してぇぇっ！　いひぃぃぃっ！」

ささやかれ、自分でも口にした言葉が脳裏の隅々と、心の奥底に刻み込まれてしまう。そのせいなのか、耳に密着する熱い唇がマゾ、マゾとささやくだけでペニスが反応し、カクカクと腰が前後に振れて快感を求めてしまっていた。その動きで、肛門に咥え込んだ指が扱かれ、開ききった菊皺とアナル粘膜をいやらしく撫で回す。凄まじい肉悦が腸奥を痺れさせ、粘膜を伝って肉棒を震わせ――触れられてもいない下着の中の勃起が、精液塗れ

のままでビクビクッと大きく跳ね上がった。
「あぐっっ、んぅぅっっ、も、もぉぉ……ひゃ、め、い……ぐっ、イクぅっ……」
「あはっ、ほんっとダメですね、お客様♪　まだ弄りだして二分ですよ？　しかもおちんちんじゃなくて、乳首とアナルだけなのに……本当に変態じゃないですかぁ♪」
それじゃあトドメです、と嬉しそうなささやきが耳を穿ち、理性を蕩かしてゆく。
「ほら、顔を真正面に向けてください、あっち向いてぇ……そう、そのままみっともなく蕩けた笑顔で、最低の射精宣言してください。さん、にー、いち……はいっ♪」
合図のように、乳首を摘んだ指がさらに強く締めつけられ、押し潰れんばかりに圧迫され、胸の奥がジンと熱く痺れだす。アナルに埋まった指も、互い違いに蠢いて腸粘膜のあちこちを何度も引っ掻き回していた。敏感な腸内急所を押し込んで捏ね回し、かと思えば引っくり返って鉤状に曲がり、お尻を持ち上げるように引っ張られる。その曲がった状態で、広がった肛門を掻きだすようにストロークされると、頭の裏側がどうしようもないほど蕩け、麻痺し、カックンカックンとはしたなく腰が揺れた。
「も、もふっ、んあぁぁっ……らめっ、だめっ、いぐぅっっっ！」
あられもなく蕩けきり、瞳が垂れた表情を晒して、大斗は彼女の言葉を繰り返す。
「へ、変態チンポぉっ……早漏、みりゅ、くっ……でまひゅっ、もれますぅぅっっ！」
「……ぷっ、くふっ、ふふふっ……よぉくできました、変態さん♥」
客である自分を完全に見下した調子で、けれど慈しむような響きを込めて、少女が柔ら

かくそう告げた。同時に、乳首が胸板へ埋まるように押し潰され、最後のトドメとばかりに陰嚢の裏側――ひと際熱く蕩けていた菊粘膜が、二本の指で丁寧にマッサージされてしまう。その刺激に腰が砕け、堰を失った牡欲はそのまま、みっともない大斗の宣言通りにもれだしてゆく。

――ブビュゥウッッ、ビクビクッッ、ビュクンッッ！　ブビュルッ、ドピュゥッ！

「あぐっ、あんっっ……はぁぁんっ、あんっ、んはぁぁぁっっ！」

触れられないままペニスが弾け、ドプドプとおもらし射精をするたびに、喉奥からだらしない喘ぎが溢れだした。恥ずかしい姿を晒すだけで、脳内に快感麻薬が膨れ上がり、全身が甘い波に蕩かされて、何度も何度も痙攣する。

「乳首とアナルはよかったですかぁ、お客様？　ほら、イクイクぅって、みっともなく喘いでくださいよ！　使い捨て紙パンツの中に、ドピュドピュおもらししちゃえ！」

「んひぃぃっっ！　あぃっ、はいぃぃっ、イクッ！　あぁぁっ、イキますぅぅっ！」

促す言葉、精液を搾るようなアナル弄り、そして乳首捏ね。それらに後押しされる牡欲が尿道を押し開き、ビュクビュクと絶え間なく白濁を吐きもらす。頭の奥と同じくらい陰嚢も火照り、煮え滾り、新たな精液を際限なく生みだして、放出しているようだった。

「あぃぃぃぃっ、イクっ、イッてるぅぅ……あぁぁぁっ……」

そのままたっぷりと五分ほどはかけられただろうか、射精に至るまでに弄られた時間よりもさらに長く、乳首とアナルを弄られ続け、大斗は屈服の証を下着の中へ、促されるま

まにドクドクともらし続けてしまった。
「はぁっ、はぁぁ……んくっ、ふぅっ……あはぁぁぁ……」
最後に、搾り取るような刺激を送り込まれてから、ようやくだし尽したと判断されたのか、乳首が解放され、アナルから指が引き抜かれた。大量に捻じ込まれた潤滑油、香り立つローションオイルがゴプッと音を立てて肛門から溢れ、太ももを流れ伝う。それを拭うように彼女の指が下着越しに勃起を擦り、射精したてのペニスの形を浮かばせた。
（も……う、だめ……動け、ない……す、ごい……気持ち、よ、すぎぃ……）
ぐったりと脱力し、支えきれずにベッドに突っ伏す大斗。その耳元へ――。
「お疲れ様でした、お客様――いえ、センパイ？　おかげでいい画が撮れました♪」
「え――」
不穏な言葉を投げかけられ、大斗は動かぬ身体に鞭打ち、顔を振り返らせる。
「セ……ン、パイ……って、いったい、君は……」
「あれ、気づきません？　んー、まぁこの部屋、ちょっと暗いですしねぇ……それに、あたしも少し化粧してますから、明るいところでよく見ないとわからないでしょうか」
ちょっと待ってください、と少女がミュールを踏み鳴らして歩き、部屋の大きな電灯のスイッチを入れた。桃色のムードランプに代わり、部屋中が明々と照らしだされ――そしてこちらに向き直った施術士の顔を目にし、大斗は表情を凍りつかせる。
「あはっ、いい顔ですね、セ～ンパイ？」

ハ…！

「それじゃ、さっそくで申し訳ないんですけど……さっきのおねだり、お願いしちゃっても……いいですか？　僕のチンポを……っていうの、ぜひっ……」

はっきりと言われるとさすがに気恥ずかしく、カァァッと耳が熱くなる。

（っっ……怖気づいてどうするのっ、もう、決めたんだからっ……）

そう自分に言い聞かせるのと同時、耳元にチュッチュッと口づけを浴びせられ、おねだりのおねだりをされては、恥ずかしさによる抵抗よりも、責任感が勝ってしまう。

「えっと……そ、の……んくっ、はぁっ、あんっ……あの、僕っ……僕の、チンポを……二人で弄って、シコシコ、チュパチュパって、い……苛めてくださいっ！」

二人の指で性感帯を弄ばれ、お尻の穴をくすぐられ、みっともない喘ぎが溢れる。その羞恥に頬を赤らめ、それでも彼女たちのためにそう口にした瞬間だった。

「ぶふっっ……くっ、ぷっ……ぷはっ、もう我慢できないっ……あはははははっ！」

「えっ――えっ、えぇっ!?」

轟くような大笑いを響かせて、萌花が苦しそうにヒィヒィと喘ぎながら身体を起こすと、満面の笑みでこちらを見下ろしてくる。

「もっ、もうっ、セン、パっ……くふっ、あはっ、きゃはははっ、おっかし～い♪　どれだけ単純で思い込みやすいんですか、センパイっ♥　あ～、サイッコーです、もうとんっでもなく可愛いですっ、くふっ……あはははっ！」

「……っっ！　まさか、騙したのっ!?　ひどいじゃないかっ、あんな……っ」

あんな恥ずかしい真似までしたのに――そんな言葉を口にしようとして、後輩にまんまとからかわれたショックが、声を詰まらせる。だが続く萌花の言葉は、そんな大斗の怒りを否定し、慰めるものだった。

「いいえっ、騙してなんていませんよ？　全部本音ですし、センパイが素敵な風紀委員長だということもわかりました……正直、少し見直したっていうのもあります。あたしの話、本当の役割のこともいまのことも、全部信じてくださったみたいですし……」

ですから、と瞳を細めて艶やかな笑みを浮かべた少女は、ゆっくりと顔を近づける。

「これは、ほんのお礼です……ありがとうございます、センパイ……んっ」

「え、ちょっ……んくっ、んっ……ちゅ、はぁ……」

いろはの舌が這い回るようなキスとは違う、唇を重ねて撫でるだけの、柔らかな口づけだった。けれどもそれは、小悪魔な彼女ではない、等身大の彼女のように感じられた。

「……ま、まぁ、思い込みが激しいって思ったのは、本当ですけどねっ。だって、あれが嘘だったとしてもコロッと引っ掛かりましたよね、センパイの場合？」

「そ、それは、そうかもしれないけどさ……あぅっ、んんっ！　い、いろはちゃんっ!?」

そんな二人のやり取りに嫉妬したように、会話を中断させる甘い快感が胸を這い撫で、肉棒の根元をキュッと締めつけて、短いストロークで緩やかに扱き上げた。

「あまりからかうものではありませんよ、萌花さん……申し訳ありません、大斗先輩……友人として、わたくしからも謝罪します。んちゅ、ちゅぱぁ……れろぉっ……」

「あむっ、んぐじゅっ……じゅるぅぅっ、んくぷっ、じゅぷぅっ……」
いろはの唾液たっぷりの口づけが浴びせられ、隙間に開いた口腔に舌が捻じ込まれる。縦横に唇を弄られ、口内を舐め回され、突かれ――たちまちトロンと瞳を蕩けさせたところで、ようやく唇が解放された。ニッコリと慈愛に満ちた笑みを浮かべ、最後に軽く口づけを残してから、いろはが甘くささやく。
「では、お約束通り……先輩のはしたない早漏おチンポを、たっぷりと可愛がらせていただきますね……失礼いたします、大斗先輩……あんっ」
「んくぅぅぅっ！　はひっ、はっ、いろ、は……ぁんっ、あっ、んんぅぅっ⁉」
突然の言葉責めに股間が疼く、その瞬間に肉竿を柔らかく握られ、半ばまで込み上げていた精液を搾りだすように、巧みな動きで根元から扱き上げられる。お尻の穴が窄まり、たまらず腰をヒクつかせて股間を突き上げると同時に、スカートの裾を翻した彼女の大きなヒップがフワリと、甘い香りを漂わせて大斗の顔に圧し掛かってきた。
「あはぁぁっ……せ、先輩、ご覧になれますか？　わたくしの、アソコ……うふふ、はしたなくて申し訳ありませんが、ショーツは脱がせていただきました……」
「あ、う、うんっ……んくっ、はぁぁっ、こ、これっ……これが、いろはちゃんの……」
驚きもさることながら、甘酸っぱく牡欲を煽る牝の匂いと、熱く火照った柔らかな肌の感触に興奮が込み上げ、彼女の手に包まれた肉棒が大きく跳ね震える。
「んぁっ、うぅんっ……見られているのですね、わたくしのオマ〇コっ……大斗先輩が、

見てますぅ、んはぁぁ……お恥ずかしい話ですが、わたくし、見るだけでは治まらないんです、欲求が……こうして自分を慰めないと、全然物足りないんですっ……」

「んぶぅっっ！　ふぁっ、ひ、ろ……んぷっ、あむっ、んぐぅぅっ！」

大斗を弄んでいるときからずっとその状態だったのだろう、綺麗に手入れされた、けれども濃さのはっきりとわかる黒々とした陰毛の茂みには、透明の雫がグチョグチョに絡みついて、むせ返るような牝臭を漂わせていた。汗と牝汁が混じり合い、残暑の気候で十分に蒸らされた湿気が鼻を刺激し、たまらず喉奥から涎が溢れてしまう。

視界に広がるのは熟したザクロのように赤々とした、いろはの柔らかそうな粘膜襞と、いやらしくヒクついて重なり合う淫唇のカーテンだ。彼女の白肌に桃色が混じり、緩やかに開きかけた蕾のような淫口から、大斗の牡の本能をくすぐる甘い粘液がトロトロと溢れ、鼻から唇にベットリとなすりつけられる。

「あむぐぅぅっ、んひゅっ、ふぁぁぁっ……あぅっ、んっふぅぅっ……」

柔らかな太ももが顔を挟み、ヒップがおでこに圧し掛かる。ズリズリと彼女が腰を前後に揺するたび、潤んだ秘部が顔中に擦れ、瞬く間に脳髄が淫臭に包まれてしまった。顔に座られ、汚されているという恥辱を感じるのに、鼓動はドクドクと高鳴って身体中に新鮮な血液を送り続ける。下半身も例外ではなく、手の平に包まれ扱かれる肉棒は、すぐにでも弾けださんばかりに躍動し、浮きだした血管を跳ねさせた。

（ふぁっ、んふぅぅっ！　な、なに、これぇ……んぐっ、た、たまんないっ、すごいやっ

……いろはちゃんの、お、ま……あ、アソコの、匂いと感触に……犯されてるっ……）

女子の手コキで射精を導かれ、顔中を包む牝臭にそれを後押しされる。後輩少女の肉厚で大きなヒップに押し潰され、それだけでたまらないほどの肉悦を覚えて腰を跳ね上げていると、そこにズシリ――と。重量感がありながら、とてつもなく柔らかな心地よい感触が加わり、足先からゾクゾクと快感が伝わってくる。

「はぶっ、んっ、あぇっ……は、へっ……こ、これ、なにぃっ……」

「先輩が先ほど、穴が開くほど眺めていらした、わたくしの……乳房です。大きく膨らんだ、はしたない駄肉ではありますが、これで先輩のおチンポを愛させていただきますね。先輩もわたくしのオマ〇コを、慰めてください……んぅ、はぁぁ……」

一瞬の空白、その直後のドロリと、熱くヌルついた液体が股間を直撃した。豊乳で挟み込まれ、天を突いて固定された亀頭を幾重もコーティングするように、粘液が絡みついて股間からクチュクチュと淫音が響いてくる。

「あーあ、いろはってば本気ねぇ……じゃ、あたしはセンパイのレクチャーでもさせてもらおっかなー。いろはに独占されないよう、しっかり育ててあげますからねぇ？」

耳朶をくすぐられ髪を梳かれ、萌花のクスクス笑いを聞きながら、背筋が快感に震える。後輩に組み敷かれて、年下扱いされている状況に股間が熱く滾り、お尻の奥がキュンッと締めつけられるように疼いていた。

「んぇ、ふぁぁぁ……んっ、これで、滑りがよくなりました……では、頂戴いたします、

先輩の童貞おチンポ……硬くて熱くて、皮も少し余ってるみたい……舌で剥き上げて、いまからペロペロいたしますねぇ……んぇ、ふぇろぉぉぉ……んれりゅっ……」
「ひぐぅぅっっっ⁉　あぃっ、いまっ、なにして――んぁぁぁっ、ダメ、だっ、あぁぁぁぁっっ！　ごめ、ごめんっ、ごめんなさいぃぃっっ！」
亀頭の下を僅かに覆う包皮の内側に、くねった舌の感触がドリルのように捻じ込まれ、敏感な粘膜塊を撫で上げた瞬間だった。受けたこともない直接的な、柔らかく熱く、蕩けるような快感刺激にペニスの根元が震え、瀬戸際でこらえていた欲求が瞬く間に解放されてしまう。頭の奥が熱く痺れ、途方もない絶頂感が脊髄を駆け抜けた。
「あぐぁぁぁっっ！　ダメっ、イッ、ごめっっ……んあぁぁっ、イクぅぅぅ――っっ！」
「ふふっ、構いませんよ、先輩……童貞エキス、たっぷりとおもらしください」
――ドプゥゥゥッッ……ビクビクッッ、ビュククンッッ！　ドビュルルルッッ！
鼻を後輩の牝臭で犯され、視界を肉悦の火花に覆い尽くされ、足先から脳天までが痺れと弛緩に包まれてゆく。お尻の穴がキツく窄まり、快感を動力にポンプとなった全身が激しく痙攣して、ペニスが精液を吸い上げた。蕩けるような快感が尿道を何度も押し開き、彼女の唇と舌に優しく撫でられた亀頭が、牡の欲望と精臭をたっぷりと詰めた白濁液をゴプゴプと吐きこぼす。その間も彼女の舌の動きは収まらず、肉竿を左右から挟み込んだ豊双丘が根元からペニスを扱き上げていた。
（あぁぁ……ぼ、僕っ、後輩にっ、フェラチオ、されてっ……イッ、てるぅぅっ！）

「はぷぅぅっっ！　んぷっ、んはっ、あむぅぅ……じゅるっ、くちゅ、れろぉぉ……んふっ、ふふふっ……先輩のおもらし汁、とぉっても濃いです……んちゅぅぅ……」

部屋中に青臭い栗の花臭が広がり、いろはの秘部の香りに混ざって鼻に届く。自分が彼女の舌で、数秒と保たずに果てさせられた――その現実を臭いと快感で心の奥にまで刻み込まれながら、さらなる快感でまたもペニスを跳ねさせられる。

「あーあ、なっさけないですねぇ、センパぁイ……恥ずかしくないんですか？　あぁ、その恥ずかしいのが気持ちいいんでしたっけ。ナンギですよねぇ、先輩の性衝動も……ほら、このコを気持ちよくさせないと止まりませんよ、しっかりしてください♪」

「んぐっ、はっ、あぁぁっ……んちゅっ、じゅるぅっ……」

後頭部を持ち上げられ、鼻先を潤んだ秘部に押しつけられる。その途端に、うねる粘膜襞の隙間で溜まっていた愛液の塊が、噛み潰した果汁のようにドプンッと弾けて垂れこぼれ、大斗の鼻と顔に浴びせかけられた。甘露がトロリと唇の隙間を縫い、舌先に触れて痺れさせる。その苦味と甘酸っぱさに混じる牝の味を感じてしまうと、大斗はたまらず唇を開き、尖らせ、柔らかく熱い粘膜に吸いついて、気がつくとジュルジュルと音を立てて牝蜜を啜り上げていた。

「んはぁぁっっっ！　んくっ、ふぅんっ……や、やっぱり、たまりません、ねっ……あっ、はぁんっ……お、男の人に、されるの……想像の、何倍もぉっ……ん、はぁむぅ……」

声音を蕩けさせ、興が乗ってきたように熱く吐息をもらしながら、亀頭に舌を這わせた

いろはが、唇を窄めてペニスに吸いつかせる。開いた隙間から舌が覗き、柔らかな唇に口づけられて跳ねる亀頭を、チロチロ、ピチャピチャと舐め擦り、イッたばかりで敏感なペニスをさらなる快感の海に叩き落とす。

「んじゅっ、んむぅぅぅっ⁉　ふぁっ、はっ、い、ろは、ちゃ……んぐぅぅっ！」

「はいはい、無駄なこと言ってないで、いろはにしっかり奉仕してください、セ～ン～パイっ？　そのままヒダヒダの奥に舌捻じ込んで、穿り返すようにしてペロペロするんですよぉ……裏側とか、穴の奥にトロットロのマン汁溜まってるんですからぁ。唇をストローみたいにして、チュウチュウ吸い上げてください。あはっ、そんな感じです♪」

呼吸とともに彼女の香りまでが肺に流れ込んで、そのたびに身体の奥から熱い疼きが広がってゆく。指示されるままに彼女の淫唇とディープキスを繰り返し、舌をくねらせるたびに膣肉に吸い上げられた舌が扱かれ、蕩け、その快楽はすべて下半身に流れ込んだ。

腕は縛られたまま、頭を上げて唇を押しつけ、犬のように舌を突きだして後輩少女に奉仕する状況が、たまらなく大斗の脳髄を溶かし、本能に陶酔させる。屈辱的なはずなのに快感にペニスはギチギチと軋み、それを癒やすように左右から豊乳が宛がわれ、肉竿を揉みしだくように押し当てられていた。

この世のものとは思えないほどの、柔らかく甘美な豊乳奉仕にペニスは喜悦の涙を溢れさせ、それが彼女の唇にチュッチュッと吸い上げられる。先ほど自分のファーストキスを奪った柔らかな甘い唇が、今度はいやらしい音を立てて肉棒を舐めしゃぶり、精液を誘っ

ていると想像するだけで興奮を掻き立てられた。
（んふぅぅっ、す、すごいっ……こんなっ、気持ちいいなんて……んくっ、あっ、ダメ、だっ……ま、また、イッちゃ……くふっ、んはぁぁっっ！）
先ほどの射精から二分ほども経っていないというのに、乳房と口奉仕に与えられた快感で、大斗の快楽中枢はいろはの牝肉に溺れきっていた。すでに奉仕の意思は萎え、動きは止まり、ただ彼女の甘酸っぱい淫部に口づけて、ハァハァと息しているだけだ。快楽を貪ろうとする牡人形に成り下がった大斗の顔の上、焦れったそうにいろはが腰をくねらせる一方――萌花はニヤニヤと笑みを浮かべ、大斗を嘲るようにささやきかける。
「あっは♪　サイッテーです、センパイのその顔、その態度……後輩に搾られるだけ搾らせて、自分はなぁんにもしようとしない、射精できればなんでもいいっていう、サイッテーの発情ワンちゃんじゃないですかぁ。いろはも、なにか言ってあげたら？」
クスクスッと響いた友人の言葉に、いろはは男性器への愛おしげな口づけを一向に緩めようとせず、湯気が立つような熱い唾液を滴らせ、伸ばした舌でベロリとペニスを舐め上げた。すでに唾液塗れになった肉棒が、豊乳に捏ねられグチュリといやらしく喘ぐ。
「んふぁぁ、はぷっ、あむじゅぅ……じゅるるるっ、ぐちゅり、れろぉぉぉ……ふふっ、わたくしはまったく構いませんよ。イカせていただけなければ、あとで自分で慰めるだけですもの……センパイの子種汁を、根こそぎ搾らせていただいたあとですけれど♥」
「ふふっ、やっらしいんだからぁ、いろはってば……よかったですねぇ、センパイ？　い

ろはは優しいから、舐められ奴隷でも許してくれるんですって……なので、安心して射精しまくってください♪　早漏さんですし、言われなくてもするでしょうけどね」
（ひゃぅっ、あうぅぅんっっ！　んっ、ち、違うのに、僕っ……そんな、つもりじゃ……あぐっ、はぁっ、んっっ――くひぃぃぃっっ！　いあぁっ、イクぅぅぅっ！）
――ブビュルルルゥゥッッ、ドプドプドプゥゥッ、ビュクビュクンッッッ！
言いたい放題言われながら、本日二度目の精液を空中に――いや、いろはの唇めがけて思いきりぶちまけてしまう。それを見た二人の笑いがまたも耳に、脳内に響き渡って、耐えがたいほどの羞恥を注ぎ込まれていた。また出ましたね、早漏ですから仕方ありません、それに童貞だし、そこが可愛いんじゃないですか――等々。後輩から敬意を持たれず、ただ嘲りと年下にするような慈しみを持たれて弄ばれ、悔しく恥ずかしいというのに勃起が治まらず、なおも快感を与えられ続ける。
（んっ、ふぅっ……ま、また、勝手に、僕だけ……くっ、うぅぅぅっっ！）
少しでも状況を変えようと、溺れそうになる心を叱咤して唇を突きだし、尖らせた舌先で彼女の粘膜襞を引っ掻き、丁寧に膣肉を舐め回してゆく。
「へぇあっ、はぁっ、んじゅっ……ぐちゅっ、れろっ、ちゅぱぁぁ……」
「あはっ、やる気出ました？　じゃあ指導してあげます……オマ〇コに舌を挿れたら、硬くしたまま平たく広げて、回転させるみたいに舐めるといいですよ♪」
聞こえてくる指示通りに舌を広げてくねらせ、熱く蕩けたグズグズの柔肉を舐め、擦り、

染みだしてくるトロトロの牝蜜を余さず舐め取ってゆく。時々、最初に指示された通りの動きで、陰唇のビラビラの隙間を舌先で穿るように舐めたり、広げた舌を軽く丸め、注ぎ口のようにして愛液を流したりすることも忘れない。

「はむちゅっ、んれろぉぉ……んっ、んはぁぁっ⁉　いっ、はっ……いひっ、いい、ですよぉ、先輩っ……あっ、んっっ♥　そこ、いいっっ、あぁぁっ、いいですっっ！」

効果は覿面だった、すぐさま下腹部のほうからいろはの可愛らしい喘ぎが響き、ペニスへの刺激が少しだけ緩やかになる。

（っっ……こ、これ……本当に、いろはちゃんが……感じてるんだ……っっ！）

女性に感極まった喘ぎを上げさせている、その感覚が胸を熱くさせる。

（可愛い声、それにっ……アソコの動きが、キュッキュッてリズミカルに締まって、僕の口にキスしてくるみたいに、むしゃぶりついてるよ……んちゅっ、ちゅばぁぁ……）

大口を開いて淫部に咥えつき、全体をペロペロと舐め回しながら、少しずつ膣奥へと舌を伸ばしてゆく。埋没する舌で膣肉を掻き抉るたびに、彼女の腰がヒクンッと大きく跳ね、舌を迎えに行くように大斗の顔を圧迫し、肉厚な尻房で強く押し潰した。

「んはっ、あはぁぁぁ……あぃっ、いひぃんっ！　はぁっ、はぁぁ……んっっ、あぁっ、そこですぅっ！　す、ごい、先輩の……大斗先輩の舌が、わたくしを……っっ」

次第に彼女の腰振りが激しいグラインドになり、まるで膣口が唇になったように窄まり、吸いついて、大斗の舌を扱き立てる。大きなヒップが持ち上がり、柔らかな感触が顔に押

しつけられるたびに、滝のような牝蜜が流れて顔に降り注ぎ、淫らに濡れ汚した。
「あひぃぃんっっ！　んぁぁっ、はぷっ、んちゅうぅぅっ……ぷぁぁ、先輩、素敵ですっ……はぁぁぁんっ、先輩っ、大斗先輩ぃっっ！　先輩の舌、好きですぅっ……」
「あ、すごいですね、センパイ？　いろはったら、イッちゃうみたいです……ほら、もう少しですよ～？　童貞でも女の子イカせちゃうなんて、男冥利に尽きますね♪」
萌花のからかうような言葉に奮起し、大斗は舌を目いっぱいに突きだして、筒の内側を這わせるようにグルリと、膣肉の中に円を描いて舐め上げる。その刹那、背中を反らしながら腰を強く落とし、蕩けきった淫肉で大斗の顔を押し潰しながら、いろはが淑やかに声を上擦らせて、声量を抑えながらも甘く響かせた。
「あぐっっ、んくふぅぅぅっっっ……あぃっ、くっ……イッ、んぁっ、あっあっっ♥」
ガクガクッと腰が震え、その振動が伝わったように、圧し掛かってくる後輩大和撫子の全身が大きく痙攣してみせた。舌先を咥え込んだ膣肉もそれ以上の痙攣を繰り返し、ジュボッジュボッと激しいディープキスのように貪欲な水音を響かせ、大斗の唇に恥蜜を注ぎながら舌への甘噛みを繰り返す。食まれるたびにゾクゾクッと快感が込み上げ、豊乳に挟まれたままの肉棒が、堪えきれなくなった欲棒を先端に弾けさせた。
――ビュクゥゥゥ～～～ッッ、ビュルルッ、ビクッビュクッッ！
「あぅんっっ!!　んはっ、はぁっ、はぁぁ……んっ、先輩……ひろほ、ひぇんぱぁい……あむっ、んちゅぅぅ……んふふ、イッひゃいましたね、きぇいにぃ……んれろぉぉ……ひ

て、あげまひゅぅ……んちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱぁぁ……れろっ、はぁむぅ……」
「くあぁぁぁっ！　あっ、ひっっ……いろは、ちゃっ……はぁぁんっ！」
緩やかな絶頂で、あまり飛ばなかった精液がペニスと乳房に振りかかったのか、その部分だけを丁寧に舐め回す舌の動きが、過敏になった粘膜塊に浴びせられる。腰をヒクつかせてもがくたび、クスクスと二人の笑いが響き、その声と舌の動きに肉悦を覚えさせられた大斗は、気がつくとまたも豊乳の谷間で、大きくペニスを躍動させていた。
「はぁ、ふぇぇ……んっ、綺麗に、なりましたぁ……んくっ、あはぁぁ……ごくっ、んっ……トロトロで、牡臭くって……あぅっ、んふぅっっ……わたくし、もうっ……」
彼女の喉がいやらしく鳴り響くたび、潤んだ局部からさらに大量の愛液が溢れ、顔中に降り注ぐ。視界に広がる粘膜襞はまるで生き物のようにグチュリ、クチュゥ……とはしたない呻きを上げて蠢き、濃厚だった牡臭をさらに濃く漂わせ、桃色に潤み光る。
「い、ろは、ちゃ……はぁっ、んむっ、んぐじゅっ、じゅるぅぅぅっ……」
鼻を強く刺激する甘酸っぱさと汗の香りに脳髄まで蹂躙され、大斗は興奮を露わに、たまらず艶めかしい秘部へむしゃぶりついていた。たちまちいろはは声を喘がせ、大きなヒップを何度もくねらせて、柔らかな感触で大斗を撫で回す。
「あふぅぅんっっ！　んぁっっ、ひゃふぅっっ……気持ち、いいです……大斗先輩、大斗……先ぱぁい……はぅっ、んっ……もう、我慢できませんっ……」
「んぁっ、はっ、あぁぁ……」

「――さっきからさぁ、言葉遣いもおかしいんじゃない？」
武道で鍛えていた大斗に膂力（りょりょく）で敵うはずもなく、引き剥がそうとしながらも大斗の握力を剥がすことができず、扉を出て廊下へと引きずり出された彼女が涙声で訴えかける。
「やめっ……やめて、くださいっ……お願いします、拾ってきて……くださいっ……」
（これは、上手くいってる……のかな？　先輩の余裕が、まるでなくなってる……）
泣き震える敬語を聞き、ようやくそこで足を止める。委員会室はこの階の一番奥にあるとはいえ、傍には階段もあり、いつ誰がやってきてもおかしくはないのだ。もしもこんなところを見られれば、一巻の終わり――もちろん大斗のほうが、である。はっきり言って、心臓はもう爆発寸前だ。
（――人が来たら、全部おしまいだよね……お願いだから、誰も来ないでっ……）
震えそうになる声を鎮めつつ、こちらを窺ってビクビクと震える彼女を振り返る。
「ようやくまともな言葉遣いができるようになりましたね、変態露出女さん？」
「っっ……そんな言い方っ……や、やめてっ……っっ……くだ、さい……あぁぁ……」
声を荒らげかけた瞬間に睨むことで、たちまち彼女は弱気な姿に戻った。普段の姿、あの痴女めいた姿とのギャップに興奮しつつも、表情にはださず続ける。
「ほら、学校の廊下で……しかも朝っぱらから素っ裸にされて、後輩の前に跪かされてるっていうのはどんな気分ですか、先代風紀委員長さん？　あぁ、聞くまでもないですよね……だって、そんなに乳首勃起させてるんですから」

ククッと喉奥で笑いを響かせてやると、カァァッと羞恥に耳を赤くした悠理は慌てて身を抱き、胸と秘部を覆い隠そうとする。恥じらう姿に心ときめき、そのあとの気丈に瞳をつり上げて睨んでくる表情にも、たまらなく魅力を感じて背筋が震えた。

（ぐはっっ……やばい、悠理さん……可愛すぎます、ほんとに……）

すぐにでも謝ってキスしたいところだが、それでは彼女を満足させることはできないはずだと、心を鬼にして今度は、彼女の髪を掴んで引き寄せる。しっとりと指に馴染む艶やかな黒髪、手触りだけで何度も射精できそうなほど、最高の快感が伝わってくる。

（こんなことしてるのに、僕っ……すごく興奮しちゃってるよ、信じられない……）

申し訳なさでいっぱいになりながら、なるべく痛みがないよう、髪の毛ごと頭を掴んで押さえる方法で、彼女の顔を自分の股間に押しつけた。

「んくっっ……やっ、だ……なに、させるの……大斗、くん……」

しおらしい彼女の姿に興奮し、ズボンの中に納まっていた勃起が激しく跳ねる。それがズボン越しに彼女の顔を叩き、熱を訴えて躍動するのが、彼女にもはっきりと伝わっているようだった。頬を赤らめた彼女は、懸命に顔を背けようとしている。だが――。

「ひぃっ、い……や、ぁ……や、だっ……んぅっ、ふぅぅんっ……」

（すっ、すみませんっっ！　だけど……ここまで来たら、やるしかないんです！）

大斗はそれを無理やり自分のほうへ向け、ズボンの前を開いてペニスを取りだした。はっきり言って、完全にアウトである。誰かに見られたら、退学からの勘当コース待ったな

しである。だがその緊張感が余計に興奮させるのか、肉棒はあり得ないくらいに硬く膨らみ、いつも以上に勢いよく天を突いて、ビクンビクンと躍動を繰り返していた。
「なに嫌がってるんですか、昨日はあんなに悦んで弄ってたくせに……ほら、今日はお口でしてくださいよ。それでイカせてくれたら、拾いに行ってきてあげますからね」
いろはとの連日の行為や、昨日のことで、やや浅黒く淫水焼けが始まっている赤黒い――というか桃黒い感じの肉棒が脈打つ。先走りの滲む先端で彼女の柔らかな頬を撫で、熱く震える唇をプニョンと押し込み、その隙間にたっぷりと擦りつけてやる。
「んむぅぅっっ、んひゃっ、はっっ……んぐっっっ、んんぅぅぅ――っっ!?」
逃れようと暴れ、拒絶しようと言葉を吐くその隙を突いて、彼女の細い唇を無理やりこじ開けると、桃色のヌルついた口腔へ牡欲の昂りを思いきり捻じ込んでゆく。彼女自身が大きいと形容した肉塊で頬肉を擦り、上顎粘膜を引っ掻きながら、舌全体に先走りを垂らし広げ、唇に腰を――汗ばんだ陰毛を押しつけて快感を吸い上げる。
「くふっっ……ふぅっ、気持ちいいですね、悠理さんの口は……」
「んにゃっ、はもぉっっ……はひゃ、ひっ……んぐぷっ、んふぅぅっっ!」
跪かせた先輩の後頭部を鷲掴み、腰を振る動きに合わせて激しく前後に揺すり立てる。涙目になって何度も嘔吐くが、それでも唇を解放してはやらない。
(そういえば、なにかやらせるのって初めてだ……この顔を見てると、すっごく悪いって気持ちになるよ……だけど、なんだろ……それなのに――)

棍棒のように硬く膨らんだ亀頭で喉奥を叩き、そのコリコリとした弾力ある粘膜の感触を味わい、熱い口内の蕩けぶりを堪能し、大斗は快感に腰を震わせた。

「あははっ、最高ですね、ほんと……ほら、いつまで僕に頼ってるんですか。しっかりしゃぶりついてくださいよ、イカせてくれないと、制服も拾ってあげませんからね」

（おかしいな……僕、なんだかすごく……楽しくなってきたっ……）

彼女のためだと思いやっていることだが、涙目になりながら唇を限界まで開き、頬を膨らませて肉棒を頬張る悠理の顔を見ていると、背筋にえも言われぬ快感が迸る。そんな彼女が愛おしくてたまらず、大斗は髪を掴んでいた手を緩めると、そのまま頭を撫で――ただし肉棒は抽挿を繰り返したままで、優しく笑みを投げかけた。

「そうそう、やればできるじゃないですか」

「んぐぶぅっ……んじゅっ、じゅぽぉぉぉっ……おぐっ、んぐぅぅっっ……」

あくまで上から目線で、まるで飼い犬が教えた芸を成功させたような、そんな扱いをされたと感じたのだろうか。悔しそうな、憤りを滲ませた表情が上を向いたが、喉奥へ亀頭を押し込んでゆくと、その表情はまたも苦悶の色に染まった。抵抗するような舌の動きが絶妙な刺激となり、焦りから大量に溢れる粘っこい唾液がニチャニチャと絡みついて、ペニスを揉み洗いされているような感覚が奔る。いろはたちから責められるフェラとは違い、相手から快感を貢がせているような、たまらない刺激が肉棒と心を震わせた。

口粘膜を締めつけさせたまま腰を引くと、悠理の端正な顔も形よく可憐な唇も歪み、だ

らしなくペニスに吸いついて引き伸ばされ、いやらしく情けないフェラ顔になってしまう。それを見て思わずクスッと笑みをもらした瞬間、彼女の反発心はついに羞恥と逆転してしまったのか、抵抗を失ったように脱力した。

「なに休んでるんですか、しっかり続けてくださいね、じゃないと――」

そんな悠理を奮起させ、自らの意思で行為を続けさせるために、あることを教える。

「ほら、聞こえるでしょう？　階段から人が上ってきてるんですから、早く僕をイカせないと、この格好見られちゃいますよ。あ、そうだ……」

言いながら携帯を取りだし、パシャリッ！　と――なにげない仕草で彼女の顔を写真に収めた。軽く瞬きし、いまの事実に気づいた彼女は思わず唇を離そうと頭を引いたが、再びそれを押さえつけて、抵抗や質問はさせないとばかりに喉奥へペニスを押しつける。

「ペナルティとして、見つかったらこの写真を僕が登録してる全員に送信しますね。それがイヤなら、さっさとおしゃぶり続けてください……こんな格好のままで――」

そしてニヤリと嗜虐的に微笑みながら、上履きから覗く足の甲で彼女の秘部を――緩みきった陰唇を軽く押し込み、蕩けた粘膜襞に溜まる牝汁をボタボタッとおもらしさせる。

（……うわ、すごっ……本当にここまで感じるなんて、思いもしなかったよ……）

「こんな扱いされて嬉ションしかけの、変態牝犬先輩？」

「んぐっ……んっ、ふぅぅぅっ……んむぅぅっ、じゅるんっ、ぐちゅぅぅっ……」

その言葉で確かに、彼女の表情は一変した。瞳が垂れ下がり、けれども諦めた表情では

なく唇は笑みを感じさせるように歪み、先ほどまでとはまるで異なる積極的な動きで、ペニスにむしゃぶりついているようだった。唾液が口端とペニスの隙間から流れ落ち、リノリウムの床に点々と雫が刻まれる。こちらが動く必要などないくらい彼女の頭は激しく振り乱され、大斗の腰に抱きつくようになりながら、爪先立ちで開脚座りになるスケベな蹲踞姿勢で、ジュルジュルとねちっこくペニスをしゃぶり扱いていた。

「おむちゅぅぅぅっっ、んぐじゅっっ、じゅぽぉぉぉ……ぉふぅんっ♥　んむっ、じゅぼじゅぼっ、じゅるぉぉぉ……くちゅっ、れりゅっ、じゅるるんっ……」

（ふぁっ、いっっ……ひっ、な、きっ、気持ち、よすぎっ……あっぐ、うぅぅっ……）

これはおそらく、成功――ということだろうか。

彼女の心には確かに露出趣味はあったが、それを自覚することになった原因は、悠理の先輩が電車で、男にされているのを見たときだった。それ以来、彼女が求めているのはその先輩のような痴態――男に犯される、女性の姿なのだろう。

それを大斗に重ね合わせたため、女装をさせて自分を辱めたのだろうけれど、それでは物足りなかったというのは、昨日から今日にかけての彼女の姿でわかっている。彼女に必要なのは、実際に男性に辱められる自分と、それを自覚する状況だということだ。

（そして――あとは、僕がっ……先輩の心を、しっかりと掴んでおかなきゃ！）

強い牡として彼女を支配し、従属させるという立ち位置であることを主張し続ければ、彼女は自分に従い、学校内ではおとなしくしてくれるだろう。もしこれを、他の男にされ

ていたらと思うとゾッとする。憧れの先輩を他人に晒さなくて済み、本当によかった。
（だけど……自分からさせるって、すごく興奮しちゃうっ……しかも、気持ちいいのが自分でコントロールできるみたいでっ……いけない、クセになっちゃいそうだ……）
快感はいつも以上に与えられているのに、いつものような搾り取られる感覚がまるで生まれてこない。それどころか目の前の牝に奉仕させ、夢中にさせているという状況が心と肉体を酩酊させ、射精に対してはとことん鈍感になっているようだった。
「ほらっ、いま踊り場に上がったみたいですよ。カツッ、カツッて女の先生かなぁ、ヒールの音が聞こえてますし……これだけ近いと、さっさとしなきゃ見つかるの確定ですね。痴女先輩の趣味も全校に知れ渡って、退学間違いなしですよ」
（やばいっ、よね……だけどもう止まらないっ、先輩っ……早くしてっっ！）
「んぐぅぅぅぅっっ⁉　んふぅぅぅっっ、んぶぶぶっ、じゅぼぉっ、ぐぷぐぷぅぅぅっ！」
退学にされるのはこっちですけどね、と心でさめざめと泣いているが、そんなことは露も知らない悠理の唇はさらに締まり、頬粘膜が窄まってペニスを包み込み、舌先が生き物のように蠢きくねる。実際に靴音は聞こえているけれど、それすら彼女に聞こえているのか疑わしいほど、蕩けて潤んだ瞳に本気の情欲を燃え上がらせ、熱烈なディープキスを肉棒に浴びせ続けていた。時折顔を傾けて、頬肉に亀頭を押しつけさせながら、歯磨きのように歯茎と歯のエナメル質で肉幹を擦り、あらゆる部分に舌先を絡ませてくる。思わず腰がヒクつきそうな鋭い快感にも、大斗は腰を突きだして彼女の口内を堪能し、唾液の絡ま

る肉悦にひたすら酔いしれてゆく。
「んぶぅぅんっっ、んふっ、んふぅぅっっ！　んぐじゅっ、じゅるぽっ、じゅぽっ……おぐっ、んぼぉぉっっっ……おぅんっ、んぐっ、じゅるるぅぅっ……」
「ぷっっ……ふふっ、すっごい顔ですね。最低の牝って感じです。エロすぎ……」
やがて、靴音が階段の上段部へ差し掛かった。悠理の顔が必死の色に染め抜かれ、再び根元までペニスを咥え込むハードなディープスロートに戻る。喉奥で嘔吐きながら亀頭を擦り、裏筋をベロベロと舐めしゃぶって、肉幹を口内粘膜で余さず扱き立てる。唾液の雫と、おもらしのように滴る愛液雫で床一面には大きな水たまりが生まれ、辺りには牝欲に満ちた濃厚な淫臭が溢れ返っていた。だが、それでも――。
「――残念、間に合いませんでしたね。これで先輩の優等生生活も、おしまいです」
「じゅぶじゅるぅぅぅっっ！　んちゅぽっ、ちゅぽちゅぽっ、ぢゅっぽぉぉぉっ!!」
悠理の健闘虚しく、女性教師のヒールがカツンッと、二階の廊下を踏みしめる。
ただ――その足は再びカツカツと廊下を叩き、そのまま三階へ向かっていった。
（はぁぁぁぁ……心臓が止まるかと思ったよ、あっぶなかったぁ……）
内心では胸を撫で下ろしながらも、裸で見上げる彼女に、そんな表情は見せない。
「残念でしたね、痴女フェラ顔が見せられなくって……さて、と」
緩んだ唇をいったん解放しようと、唾液塗れになったガチガチのペニスを抜き取ってあげる。デロォォォォ……と白濁するほど攪拌(かくはん)された、まるで精液かと思えるような先走り

と唾液の混合汁を引き伸ばし、ダラダラと吐きこぼさせながら、濡れ光る男根が彼女の視界でブラブラと揺れた。それを蕩けきった桃色の眼差しでポウッ……と呆けたように見つめ、悠理は全身をヒクつかせながら、震える腰を前後に振り立てる。

その、開ききったムチムチ太ももの足元では――。

「んぁ、あひっ、いひぃぃぃぃ……んぐっ、んんぅぅぅっ……ふっ、ふぇぇぇ……」

プシャァァァッッッ！　と激しい勢いで夥しい水飛沫を上げて潮吹きをした直後に、感極まったかのように黄金水まで垂れ流し、その卑猥な水たまりをパシャパシャと叩いていた。蹲踞姿勢でのフェラチオという、あまりにみっともない姿で座り込んだ悠理は、ついに本当の肉悦を堪能できたというように表情を蕩けさせ、ブツブツと呟いている。

「すごいですね、あのときのオナニーでもここまでイッてなかったのに……どんな気分ですか、悠理さん？　よく聞こえませんけど？」

そう問いかけると、耳先をピクッと跳ねさせた彼女が、僅かにこちらを見上げた。

「んっ……う、んっ……ひゃい、こっ……れひ、た……ひ、ろ……ひゃま……」

（うん、やりすぎた……でも、反省はしてない、かな……だって……）

そう思えるくらい彼女の蕩けきった顔は幸せそうに緩み、微笑み、淫欲に陶酔しきっている。ただ、こうなった言い訳やら説明やら、それと――。

（僕が、悠理さんを本当に好きだってことだけは……しっかり伝えておきたいしね）

そう考えた大斗は、とりあえず彼女を委員会室へ運び、廊下の掃除をすることにした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!